

# Learning from Each Other

山崎茂明先生ご退職記念講演会

## 山崎茂明を読む



*With My Best Wishes  
Shigeaki Yamazaki, Ph.D.  
24 Feb. 2018*

2018年2月24日(土) 午後2時

於 愛知医科大学

# 目 次

(タイムテーブル)

## 第1部 教育者として 14:00~14:30

- 第1章 学術雑誌塾
- 第2章 医学情報サービス研究大会 (MIS)
- 第3章 大学での教育

## 第2部 研究者として 14:30~15:30

- 第1章 人と資料との出会い
- 第2章 「論文、学術誌、文献DBは、科学研究活動を映す鏡である」発表倫理の論点整理

質疑応答 15:30~15:40

懇親会 16:30~

本日の講演は、ただの講演ではなく、「山崎茂明」という「本」を「読む」という企画になっています。山崎先生のこれまでのご経験、そしてこれからのことについて、読書をするように楽しみながらお聞きいただければと思います。

この資料は、そんな「本」を模しています。白紙のページが本文です。みなさま自身の手で気に入ったお話をそこに書き込んでください。

付録には、本日のシナリオと、「索引」を用意しました。第1部では、「索引」から気になることばをみなさまの手で引いて、先生に語っていただきます。

読書をしたあとは、ぜひ感想文をお書きください。下記URLに提出フォームをご用意しました。400字~800字程度でまとめて、4月30日(月)までにご提出ください。いただいた原稿は、5月中にまとめて、今回ご参加いただいたみなさまで共有しようと思います。その際、今回お申し込みいただいたメールアドレスへご連絡を差し上げますので、ご承知おきください。

提出フォームURL : <https://jp.surveymonkey.com/results/SM-66FXB9XB8/>

今回は有志の手による、たいへんアットホームな会となっております。ぜひリラックスして、午後の読書をお楽しみください。

# Learning from Each Other

山崎茂明先生ご退職記念講演会



## 山崎茂明 を読む

2018年2月24日（土）

午後2時～3時30分

愛知医科大学

大学本館3階 303教室

地下鉄東山線「藤が丘駅」下車

名鉄バス4番乗り場「愛知医科大学病院行き」

キャンパスマップ <http://goo.gl/BmG8qi>

ファシリテーター

青木 仕 順天堂大学 学術メディアセンター

小林晴子 愛知医科大学 総合学術情報センター

西村飛俊 一宮市立中央図書館

企画 山崎先生講演会実行委員会

研究者は、研究の着想やデザインから、データ収集と分析をへて、さらに考察を加え、最終的に成果を論文にまとめます。論文には再現性を保証する上で必要な情報が記載され、結果の信頼性が担保されます。論文発表を通して、研究成果は専門領域の進歩に寄与し、信頼できる知識として社会へ応用されていきます。発表なくして、科学研究活動は完結しないだけに、発表倫理（publication ethics）に焦点をあてることで、研究プロセス全体の公正さをチェックできます。

この発表倫理の問題に図書館情報学や医学図書館の視点から取り組まれた山崎茂明先生は、本年度で愛知淑徳大学をご退職されます。この企画では、3人のファシリテーターと山崎先生の対話を通して、先生の長いキャリアを振り返っていきます。その中でなぜ発表倫理が図書館情報学や医学図書館にとって問題になるのか、あるいは先生の大学での教育において重点となったものは何だったのかにせまり、現役の図書館員だけでなく広く社会に向けてのメッセージをお聞きしていきます。この講演では、舞台にあがるのは演者だけではなく、ファシリテーターとの対談形式で進めていきます。山崎先生という「本」を、リラックスした雰囲気の中、参加するみなさまで「読んで」いきます。



## 山崎茂明 Profile

1947年東京生まれ。早稲田大学第一文学部（社会学）卒業、慶應義塾大学大学院図書館・情報学専攻博士課程満期退学。紀伊國屋書店、埼玉医科大学附属図書館、東京慈恵会医科大学医学情報センター（講師）をへて、現在、愛知淑徳大学人間情報学部教授。専門は、科学情報メディア論と科学コミュニケーション、特にレフェリースystem、研究業績評価、科学発表倫理。1989年夏、College of Physicians of Philadelphiaへ短期留学、アメリカ医学教育形成史についての実証的な調査を行った。1998年に、「計量文献学的手法による研究開発評価指標の研究及び生命科学分野へのその応用」で第33回科学技術情報振興賞（学術賞）を受賞。2001年「生命科学領域を対象にしたビブリオメトリックスによる研究評価指標の研究」で、博士（図書館情報学）愛知淑徳大学。著書は、「医学文献サーチガイド」（日本医書出版協会、1996年）、「生命科学論文投稿ガイド」（中外医学社、1996年）。「看護研究のための文献検索ガイド」（共著、日本看護協会出版会、1999年）、「EBMのための情報戦略」（共編著、中外医学社、2000年）。「研究評価」（共編著、丸善、2001年）。「科学者の不正行為」（丸善、2002年）。「論文投稿のインフォマティクス」（中外医学社、2003年）。「インパクトファクターを解き明かす」（情報科学技術協会、2004年）。「ORI研究倫理入門」（翻訳：丸善、2005年）。「パブリッシュ・オア・ペリッシュ」みすず書房（2007年）、「科学者の発表倫理」丸善出版（2013年）、「科学論文のミスコンダクト」丸善出版（2015年）。代表論文は、「Ranking Japan's life science research」Nature 1994.

## TIME TABLE

午後1:30	受付開始	
午後2:00~2:30	「教育について」 ファシリテーター	小林晴子 西村飛俊
午後2:30~3:20	「研究について」 ファシリテーター	青木 仕
午後3:20~3:30	質疑応答	
午後4:30~	懇親会（任意参加） 会場	愛知医科大学 食堂Orange

講演会費 無料

懇親会費 3,000円

（当日会場で徴収します）

## 申込方法

参加をご希望の方は、下記申込フォームかメールでお申し込みください。なお、当日直接ご来場されてもご参加いただけます。

ただし、懇親会への参加をご希望の方は、事前申し込みをお願いします。（締切 **2月12日（月）**）

メールの場合は、「ご所属先名」「お名前」「当日連絡可能な携帯電話（あれば）」「懇親会への参加有無」をお書きください。

申込フォーム <http://ur0.pw/l3ns>

メールアドレス [y2018.aichi@gmail.com](mailto:y2018.aichi@gmail.com)

ご来場の際はできるだけ公共交通機関をご利用ください。

その他ご不明点があればメールでおたずねください。

山崎先生講演会実行委員会 担当：西村

[y2018.aichi@gmail.com](mailto:y2018.aichi@gmail.com)

山崎茂明を読む  
愛知医科大学本館 3 階 303 教室  
2018 年 2 月 24 日(土)

<教育者として>

- ・教育の原点は、学術雑誌塾の活動
- ・生涯教育の展開は、医学情報サービス研究大会「Learning from each other」
- ・「医学図書館」編集委員長
- ・医学情報学教育の教科書の作成、『看護研究のための文献検索ガイド』(山添美代、六本木淑恵;1992 年)、『医学文献サーチガイド』(1993、1996)

<研究者として>

- ・リサーチの基本は、現地訪問。人と資料との出会い
  - ・論文、学術誌、文献 DB は、科学研究活動を映す鏡である
- 主要な研究テーマであった「発表倫理(publication ethics)」の論点整理  
1998 年 4 月－2018 年 3 月:愛知淑徳大学

1. Nature 1994 の反響

Rankings Japan' s life science research.  
定量的な視点から定性的な視点による展開へ

2. 不正調査レポートの入手(1997 年秋)

ORI 不正調査報告書の全文を入手(Freedom Information Office)  
三例の、米国留学中の、日本人研究者による不正行為事例。読後に気づいたこと  
懲罰を加えるのではなく、研究者のやり直しを支援する教育的なものである。  
報告書は国外からのリクエストに対応する。

3. キーパーソン、キー機関、キー図書館と出会う(1998 年)

研究公正局(ORI)への訪問(2 月)研究支援のためのデータベースの提言(科  
研)。誤り情報の扱いについて。調査レポートの公開と、ORI レポートをはじめ、著  
作権はフリーである。許諾は必要ない。ORI は警察ではなく、教育啓蒙機関であ  
る。

第 100 回 Medical Library Association フィラデルフィア大会(5 月)

Kennedy Institute of Ethics Library の展示ブースでレファレンス・ライブラリアンの  
マルチナ・ダーガさんと会う。「ワシントンに来たら Georgetown 大学に必ず来るよ

うに」との助言を受けた。

第二回国際科学編集者会議 (Washington DC, 9 月)への参加を期に、KIE 図書館と ORI のシーツ博士と面談。Mary Scheetz 博士 (It's a small world) は、ピッツバーグ大学で Authorship をテーマに博士学位論文をまとめたが、彼女の指導教員の Detlefsen 博士は、野添篤毅先生の友人であった。Mary からの助言、この問題について研究者に講演する際、research misconduct ではなく research integrity という言葉で語るべきである。前向きで positive な姿勢で対処すべきである。

KIE 図書館の ETHX ファイル: 12 万件の資料ファイルが生命倫理研究を支える  
気づき: 科学研究の misconduct で検索すると、ナチスや 731 部隊による生体実験の文献が見つかった。戦争は科学の最大のミスコンダクトである。

研究不正は感染症であり、研究環境への公衆衛生学的アプローチが求められる。  
個人への介入でなく環境への働きかけが必要である。

#### 4. 風と空気

不正の存在を認める。そのうえで対処方針を考える。誤りを認めることが最初の一步である。撤回にあたり、当該論文をデータベースから除外するのは誤りであり、回収し差し替えしてはいけない。

#### 5. 解法としての Publication ethics (発表倫理)

研究活動は発表なくして完結しない。研究論文が社会の健全性を保証し、知識基盤社会を支えている。主要なテーマは、レフェリーシステムと authorship になる。

#### 6. 情報専門職 (図書館員、データベース制作者、編集者、記者)

誤り情報 (訂正、撤回、不正行為) の識別、記録、管理、伝達に係わる知識から、オーサーシップ、同僚審査、編集、出版、ライティング、索引検索といった多彩な知識を持ち、知識基盤社会を支える情報専門職となる。

---

学 歴:

- 1971年3月 早稲田大学第一文学部社会学専修卒業  
1979年4月 慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻修士課程入学  
1982年3月 慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻修士課程修了  
1982年4月 慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻博士課程入学  
1985年3月 慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻博士課程修了
- 

職 歴:

- 1971年10月 (株)紀伊國屋書店入社  
1977年1月 埼玉医科大学附属図書館就職  
1982年4月 東京慈恵会医科大学医学情報センター助手  
1986年4月 東京慈恵会医科大学医学情報センター講師  
1989年7月-9月 米国 College of Physicians of Philadelphia, 訪問研究員  
1998年4月 愛知淑徳大学文学部図書館情報学科助教授  
1999年4月 愛知淑徳大学文学部図書館情報学科教授  
2010年4月 愛知淑徳大学人間情報学部人間情報学科教授  
2018年4月 愛知淑徳大学名誉教授

# 『山崎茂明を読む』の刊行にあたり

山崎茂明

定年退職(2018年3月)にあたり、働くことのスタート時を振りかえり、心に残った言葉について記してみたい。

「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、  
かつ消えかつ結びて久しくとどまることなし」(鴨長明『方丈記』)

大学4年の頃でした。就職する気持ちになれないまま、荻窪のスーパーマーケットで、商品管理のアルバイトをしていました。昼休みになると屋上で文庫本を読んでいた。方丈記は、そんな一冊でした。そのとき浮かんだ光景には、川で自分が流されている姿がありました。将来像を描けずに流れに流されている状況です。しかし、『流されながら、少しずつ自分の意思で、流れていけば良い』と思えるようになりました。紀伊國屋書店の面接では、小説家である田辺茂一社長から、最近どのような本を読んでいるかたずねられたのを思い出しました。入社試験は新卒と一緒にでしたが、卒業していた私は、すぐに横浜営業所に配属され、大学と研究所へ洋雑誌と洋書を中心とした営業活動に従事しました。

英文タイプライターを打つことからはじめました。Books in Print や Ulrich's は、重要な社内資料でした。営業の仕事を通して、横浜国大の図書館員や研究者と知り合いになりました。その中に、京大でギリシア哲学を学んだ桧垣さんがいました。小柄で片方の耳に補聴器を付けていました。着古した白衣を着てレファレンスカウンターに座っていました。年度末に会いに行くと、高額な百科事典を発注してくれました。新人であり、注文がうまく取れないことを知っていたのでしょう。4年7ヶ月をへて、書店を退職し、図書館員になるために鶴見大学の夏期司書講習を受けましたが、そのとき分類や目録などの講義や演習は、桧垣さんをはじめとした横浜国大の図書館の人たちでした。さらに、講習が終了したとき、埼玉医科大学を紹介してくれました。当時も、



司書の就職は広いものでなかったのに、心配であったのだと思いました。

書店員から医学図書館員に転職し、実際に働き出すと、様々な問題があることに気づきました。図書や雑誌といった記録資料の組織者でありながら、自分たちの仕事を報告書にまとめ、問題の共有をはかり、解決へと向かうといった基本的な姿勢が不足している点でした。営業マンであったとき、日報、月報、季報、年報と、日々報告書の作成が求められました。文学部卒業の私ですが、仕事の世界でこれほど文章を書くとは予想もしていませんでした。入社3ヶ月で、年報をまとめましたが、そこで書いた市場の予算規模、同業他社のシェアなど、市場動向の分析を評価してもらえました。それだけに、資料組織の現場で働く情報専門職の現状には、満たされない思いでした。良い仕事をするためには、本格的な学びが必要であり、退職して慶應大学大学院へいくために受験しました。

図書館では、大学医学雑誌の編集を担当しました。そして、働きながら大学院で学ぶことを許可してもらい、修士課程を修了し博士課程へ進むとともに、東京慈恵会医科大学の医学情報センターへ転じました。編集の仕事は、大学院での学びと連動する部分も多く、執筆や編集作業を通して教員と話すことなど良い勉強になりました。この埼玉医科大学を退職する際、外科のS先生から色紙をもらいました。そこには、「照一隅」と記されていました。「それぞれの立場で精一杯努力する人はみんな、何者にも代えがたい」という意味です。編集業務という地味な仕事を遠くから見ていた人がいたのであり、報われた気持ちになりました。

# 山崎茂明を読む

## 読者情報

- 名前:城山泰彦
- 所属:順天堂大学学術メディアセンター

山崎さんに初めてお会いしたのは、おそらく“学術雑誌倶楽部”の勉強会です。(それ以前にも『医学図書館』編集長として、友人のご親戚として、存じあげておりましたが…) 私は1992年4月に就職したので“学術雑誌塾”に間に合わず、学術雑誌塾で学ばれた先輩方が主催する、学術雑誌倶楽部に参加させていただきました。たまたま荷が重い課題が課されましたが、先輩方と一緒にさせていただく居心地がよく、無理なく学べる機会をいただきました。

その後も山崎さんには、“医学情報サービス研究大会”、“生物医学図書館員研究会”、『医学図書館』でお世話になり、医学図書館員が研究活動をする事の大切さを教えていただきました。そして発表や執筆後に、ご助言や「面白かったよ」とお声がけいただけただけが嬉しかったです。その一言をいただきたいために、頑張ることができました。

山崎さんとの印象深い思い出は、東京慈恵会医科大学での学術雑誌倶楽部勉強会で、Nature 論文のテレビインタビューを拝見した回です。開始時刻を過ぎても山崎さんと私の他に誰もいらっしゃらなくて…、おそれ多くて「延期にならないかな」と思ってしまいました。山崎さんは「さあ始めようか」とおっしゃり、録画をみながら研究の概要やエピソードを、緊張している私だけに丁寧にお話してくださいました。今思えば贅沢な経験で、この時にデータを分析する研究に目覚めた気がしています。

記念講演会は山崎さんのお人柄を反映した温かな会で、関係されたみなさまのご尽力に感謝しております。子どもと一緒に、当日参加させていただけてよかったです。時期に生物医学図書館員研究会で、医学情報サービス研究大会と生物医学図書館員研究会に関するご講演の機会をいただけましたら嬉しいです。勝手ながら山崎さんの背中をまっすぐに追わせていただき、学ばせていただきました。ありがとうございます。ご健康とますますのご活躍を、心より祈念しております。

## Nature 1994 年



Ranking Japan's Life Science Research が、Nature (1994 年)に掲載されたことは、私にとって事件と呼べる経験であった。反響は大きく、テレビ(NHK)、ラジオ、新聞(全国紙、地方紙、英文紙)、から始まり、手紙、電話、ファックスなど 100 を超え、海外からの問い合わせも 3 件あった。レフェリーとのやり取りをとおして実感したのは、Nature が求めている論文は独創性(originality)ではなく、面白さ(interesting)にあるという気づきである。そして、歯学領域の人々が驚かされたストレートな表現があった。「the paper production at dental school is low and research performance is poor」の一節に記された poor という言葉である。投稿原稿では「not active」と記述していたが、Nature の編集者によってリライトされた部分である。編集者のストレートな言葉は、読者に深く浸透したといえる。私は、世界的な科学誌を身近な存在に感じた。

## 読者情報

- 名前: 児玉 闊
- 所属: 東邦大学医学メディアセンター

山崎さんご本人は知らないと思うが、山崎さんは私の人生に大きな影響を与えた人物のひとりである。某書店の営業だった私は、ライフワークを持てる仕事につきたいという願いから、医学図書館員に転職した。その時すでに、私の人生の中に山崎さんとの接点を用意されたのかもしれない。転職した翌年初めて出会い、それを機にすぐに慕うようになった。その後、書いた論文を見てもらったり、発表を聞いてもらったり、大学院進学の相談をしたりもした。山崎さんからもらう一言には含蓄がある。私はその一言に、ある時は喜び、ある時は勇気づけられた。それは今も同じである。

山崎さんは、私にとって手本でもある。しかしその手本はどんどん進化していく。「山崎茂明を読む」の索引を見れば一目瞭然だ。私は手本に近づこうと(一応)努力したが、私の努力ではまったく追いつかない、むしろどんどん引き離されていった。山崎さんの研究テーマは、レフェリー制度からビブリオメトリクスへ、研究評価へ、さらに発表倫理(ミスコンダクト)へと展開した。これはある意味衝撃的だ。今となれば、山崎さんが辿った道として説明されれば、なるほど、筋の通った一本道に見える。しかし当時、それぞれの転換期にどうしてそれを選択したのか、謎であった。ただ私は、予測外の展開に快感すら覚えた。それぞれの選択の時、山崎さんにはどのような未来がみえていたのか、「山崎茂明先生を読む」でもまだ解き明かされていない気がする。

私からみて、山崎さんの研究ですごいのは、「師の影を感じられない」点である。もちろん山崎さんにも師はいる。大学院では、津田先生に師事されていたことは知っている。しかし大学院を出た後の研究は、ほぼ「山崎茂明ブランド」である。これは大学院で研究をした身であり、未だ指導を受けている私からみて驚異である。「引き継ぐ」より「生み出す・始める」、これが山崎茂明スタイルなのであろう。生物医学図書館員研究会、医学情報サービス研究大会、学術雑誌塾と、それぞれの時代に欠けているものを見出し、必要なものを創造してきた。山崎さんの研究の展開にも共通しているように感じる。

私が気付かないことを、山崎さんはさらっと言う。私にできてないことを、山崎さんは次々とやる。だから山崎さんは私にとって魅力的であり、目が離せないのだ。私は「山崎茂明先生を読む」をまだ読み足りない気がする。続編を期待したい。

## 読者情報

- 名前:坪内 政義
- 所属:愛知医科大学学術メディアセンター(元)  
“山崎茂明先生”を読んで一索引語を参考に

先生から医学情報サービス研究大会のお誘いメールが届きました。参加のお誘いではありません。第22回大会(2005年)をわたしにやってほしいというのです。もちろんこのとき具体的なプランなど浮かぶわけありません。しかし最後まで読まないうちに引き受けようと決めていました。東海地区のわたしの身近にいる人たち。特に若い人たちにとって大会運営は絶好の学習機会になるはず。研修・講義を受けるのはもちろん有益です。しかし自分で表現するならもっと多く様々に学べるでしょう。研究大会の運営は最良の表現の場に違いありません。

およそ一年後の大会がどのような大会だったかは多くの方がご存知です。わたしたち実行委員は学習の場を共有しました。その機会は先生からいただいたものです。なぜ先生はわたしに大会をやらせてみようとしたのでしょうか。十数年を経た今でもそれを考えることがあります。2018年2月24日。“山崎茂明”を読んで改めて考えました。雑誌塾といいサービス大会といい『医学図書館』といい。先生の「場を作る」力はどこからくるのだろう。われわれには何が必要か。自分は何をやりたいのか。的確に考える。しかし考えすぎず「きおひなく」実行する。それは「評価はしない世界」。そこに「教えあう＝学びあう」つながりを求める「人が集う」。「純粋な気持ち」とはそういうことだ。

ところで「月の法善寺横町」は修業の旅に出る板場の心意気を唄います。そして“こいさん”への愛を誓う歌でもあります。「包丁一本」晒しに巻いて「40代から旅へ」。先生が異国の空に誓ったことに終わりはないのでしょうか。これからの旅に幸あれ。

#### 読者情報

- 名前: 安田多香子

---

- 所属: 愛知県がんセンター図書室(元)

2月下旬、「医学図書館」を卒業してほぼ2年。懐かい「本」を見つけて懐かしい仲間と一緒に読むこととなった。第2部1の「Nature 1994の反響」の章で、忘れていた24年前の記憶が一挙に蘇った。「そうそう！ そうだった！！」この「Nature」の記事が新聞に大々的に取り上げられ、あちこちで反響を呼んだ。その一つが我が「愛知県がんセンター」の研究論文のランキングについてでもあった。当時、「研究評価のランキング」は画期的で、センセーショナルだった。

「どういう手法で、どうするのだろうか？」と思ったのがきっかけで、この「山崎ワールド」に足を入れることになった。同じ手法で「愛知県がんセンター」の論文をMedlineで検索。著者の所属表示のあいまいさ、検索期間の設定も影響することもわかった。この結果を所属の新聞に投稿したり、研究所の所長に評価されもした。それが「医学情報サービス大会」への参加にも繋がった。私の「医学図書館」界へ入るきっかけでもあった。それから「山崎」先生の視点は「医学図書館員」を導いてくれる灯のようだった。

今回、数ある「索引」の中で、「LANCET 包丁一本」では変わらない語り口で、その「気概」が語られ、「そうだったんだ・・・！」と感慨深かった。今後もその「気概」で変わらぬ灯を照らしつづけ「本」の続きを書いて欲しい。

#### 読者情報

- 名前: 服部恭子

---

- 所属: サンメディア

山崎先生のさまざまな経験や考え方を知ることが出来、大変貴重な時間を過ごせたことに感謝いたします。気になることや叶えたいことを突き詰めていけることはとても素晴らしいことだと思いました。粘り強く、息が切れない様に物事に取り組んでまいります。

## 読者情報

- 名前:磯野 威
- 所属:NPO 日本医学図書館協会

山崎茂明先生との最初の出会いは1999年(平成11年)のJMLA総会(九州福岡大会)のランチョンミーティングでした。そのテーマは「EBM」です。総会の中の昼食のひと時、たまたま山崎先生の隣に座を占めることができEBMの基本を聞かせて頂きました。磯野にとってはその後の厚生労働科学研究事業への関わりのメルクマールとなる出会いだったのですが、講演会後の懇親会で山崎先生に尋ねるとあまりご記憶に残っていないようでした。しかし、平成11年から始まった厚生労働科学研究班には山崎先生に分担研究者としてご協力いただくことができたのです。研究課題は「日本におけるEBMのためのデータベース構築および提供利用に関する調査研究」。それは国立公衆衛生院(当時)の図書館をEBM情報センター(日本のNLM?)として運用していくための基礎計画を調査研究するというものでした。医学図書館界からは野添篤毅先生、裏田和夫先生、山口直比古さん、阿部信一さんはじめ、多くの方々にご協力をいただきました。

山崎茂明先生を読ませていただいて山崎先生の研究テーマの核心部分、さらにご関心のありようをお聞きしながら、1999年当時の先生の開かれた塾(?)の聴講生のひとりとして、磯野はあまりに未熟であったな〜と慨嘆することしきりです。「学術雑誌塾」「生物医学図書館員研究会」「MIS」などでの人材の育成環境づくり、そしてなにより「研究者」として普段からの勤勉さに裏付けされたテーマを追い続ける姿勢。「Mistake」「Error」「Misconduct」さらに「Ethics」「Moral」にいたる科学者の発表倫理への洞察には首を垂れるばかりです。「医学図書館」の編集委員長を長く勤められ、「Learning from each other」を貫かれている山崎茂明先生の生きざまに深く傾倒するものです。

講演会に参加された方々は山崎先生を中心に今まで多くの場で共に鍛え、愉しんでこられたのであろうと、羨望の念も禁じ得ないところです。一読者としてこれからも山崎先生を愉しく読ませていただきたく存じます。

## 読者情報

- 名前:北川正路

---

- 所属:東京慈恵会医科大学学術情報センター  
「意匠」にとらわれず

「山崎先生は何の先生なのですか？」山崎先生が在職されていた大学に勤務していることもあり、時々受ける質問なのですが、一言で表現することができず、返答に詰まってしまいます。

今回、「山崎茂明を読む」という山崎先生の業績のエッセンスが凝縮されている内容の深い図書を拝読し、返答に詰まってしまうのも当然であることが確認できました。山崎先生は、教育、研究活動において、ご自身が出合われている多様なテーマを常に追いつけ、柔軟に展開されているので、「(特定の)『..学』の先生です」と一言で答えるのは困難であるのだと思います。

ふと、山崎先生が『様々な意匠(小林秀雄著)』の「意匠」についてお話しされることのあることを思い出しました。山崎先生の意図を誤解している恐れがあるのですが、山崎先生は、特定の主義(「意匠」)をまとわず、広い視点を持つ重要性を指摘されているのだと思います(山崎さん、見間違いでしたらお許してください)。『様々な意匠』には、「芸術家にとって芸術とは感動の対象でもなければ思索の対象でもない、実践である」、「重要なのは歩く事である」との記述があります。今回の読書会で紹介のあった山崎先生の業績のひとつひとつは、特定の「意匠」にとらわれず、ご自身の探求心に従って、実践し、歩いている山崎先生の姿そのものであり、また、その時々足跡(「里程碑」として残してくださっている講演、著作、勉強会などであるのだという感想を持ちました。山崎先生を通して教えられていることを大切にして、自分自身の歩みを見直していきたいと思っております。



## 読者情報

- 名前: 松本佳奈

---

- 所属: 広島県立図書館

山崎先生の研究者として考えてきたことを聞くことができ、とても有意義な時間だったと思います。雑誌塾を作って、一緒に勉強したり、研究したりする仲間を作ったこと、その後、雑誌塾というグループは役割を終えて休止し、それぞれの研究へ進んだ話が印象に残りました。山崎先生と雑誌塾に参加されていた方の雑誌塾への感じ方が少し違った点、自分が始めた雑誌塾を目指す方向と違ってきたので休止させた点など、面白いと思いつつ、今後に役立てようと思いました。やっていること、やりたいことが違うと思ったら、立ち止まってみる、思い切ってやめてみることも、選択肢に入れてみる必要があるのかもしれませんが。雑誌塾とは逆に、今でも続いているサービス大会の話も興味深かったです。また、誰かと競い合ってレポートを書いていくエピソードも、素敵だと思いました。おそらく、私の課題は、モチベーションの維持をすることが難しい点だと思うので、参考にしたいです。いつか、専門性の包丁一本でわたっていけるように、何か自分の強みを見つけて、研ぎ続けられるようにしたいと考えています。

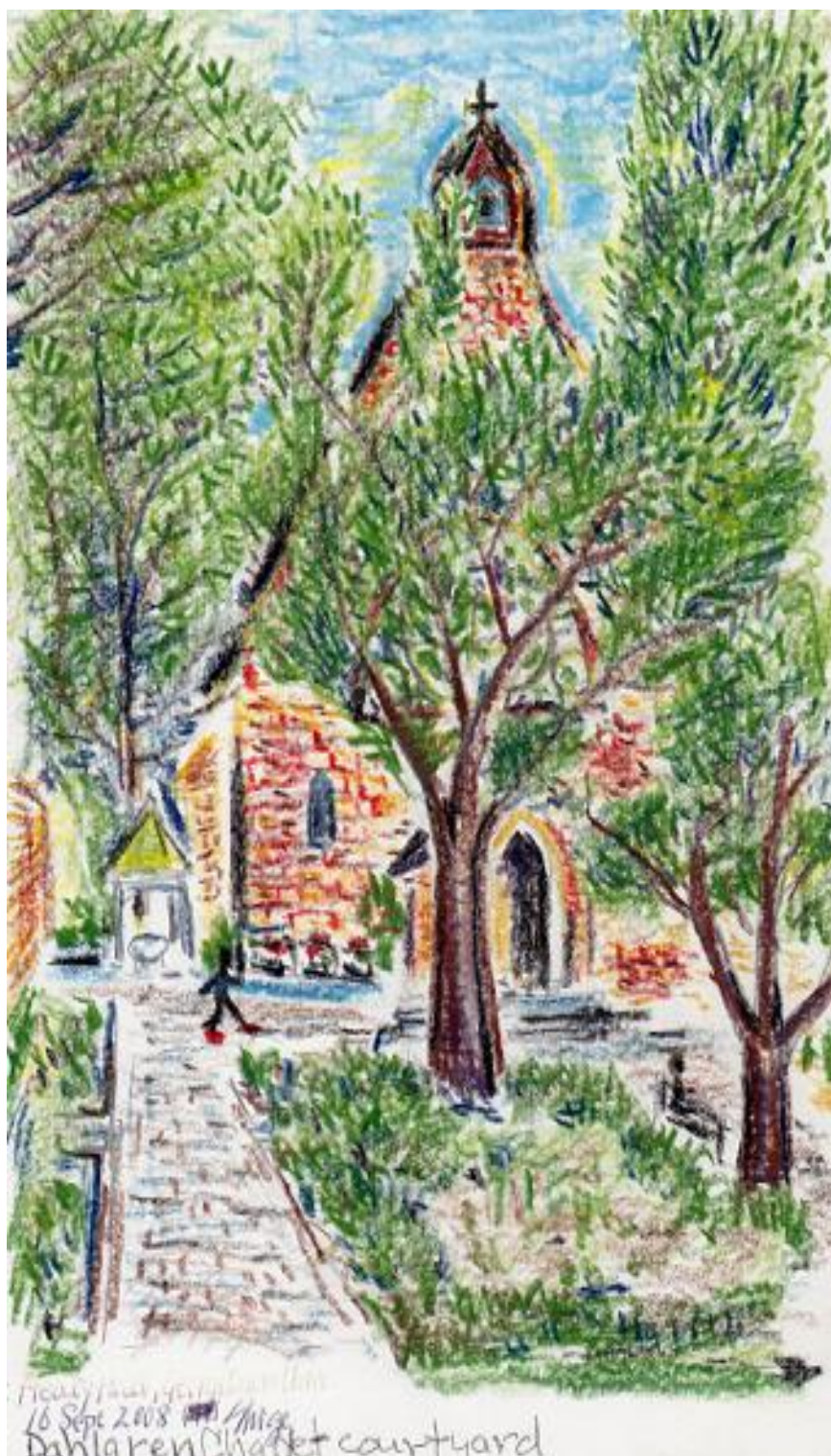
## 読者情報

- 名前:西村飛俊
- 所属 :一宮市立中央図書館(愛知県)

私が大学で先生の元を最初に訪ねた時、とりあえずぼんやりとした研究計画をお話したように思います。ふわふわと夢のようなことを考えていただけで、まったく地に足がついていなかったように思うのですが、先生からは「とてもいいね」と言っていただけでした。その後、博士課程までの都合7年間は、まさに夢のような時間でした。

その間にさまざまなことを学びましたが、最も私が学んだと思えるのは先生の研究に対するひたすらに実直な姿勢でした。手を動かすということがどれほど大変で、どれほど努力を要するかは先生の研究結果を見ればわかりますが、間近で学んだおかげで、その作業の尊さというか、人間の輝く瞬間というものを学んだように思います。私は先生からアカデミアの生業を学んだと思っていましたが、今回の先生のお話を聞いて、それ以上に人の生き方を学んでいたことを改めて思い起こしました。

いま私の人生に方針があるとしたら、それは先生に形作っていただいたものだと思います。山崎先生はこれからもご活躍されることと思います。これからもぜひご指導いただくとともに、私自身も少しでも社会へ貢献することで先生のご恩に報いられればと思っております。



Kennedy Institute of Ethics Library は、Georgetown 大学の Healy Hall にあり、世界的な生命倫理研究の中心地である。ホールの中庭には Dahlgren 教会があり、祈りの場になっている。

## 読者情報

- 名前: 山崎慎一
- 所属: 桜美林大学

山崎茂明氏は、科学コミュニケーション論を基盤に、レフェリーシステム、研究業績評価、研究発表倫理など、当該分野の研究成果のみならず、高等教育の根幹をなす研究をこれまで続けてきた。そのため、自分としては様々な研究をしてきたという印象であったが、「山崎茂明」を読む中で、そこには研究者として変わることのない哲学があることに気付かされた。

氏のこれまでの研究活動の足跡からは、権力や権威におもねることなく、どのような立場においても、学問の自由を謳歌し、批判的精神を持ち続けていたことが伺い知れる。こうした精神は、研究者としては恐らく当然であり、実際に氏も特別なことをしてきたわけではなく、興味関心のあることをやってきて、気付けば道になっていたという表現をしていた。しかし、一若手教員として、また一高等教育分野の研究者として、日本の大学における研究環境を改めてみると、大学の研究者からはこうした精神性が失われつつあるように思える。「山崎茂明」を読むとは、研究者としてのあるべき姿を学ぶことであった。また、「山崎茂明」を読み解く中で、自分のこれまでの人生を振り返ると、研究者としての生き様を学び続けていることに気付いた。

必ずしも学ぶことが好きではなかった自分が、なぜ研究者になっているのか、この疑問は常々持っていた。しかし、読書を終えた今、この疑問は払拭され、むしろ、息子である自分が研究者として生きていることに、ある種の必然性を感じている。

## 読者情報

- 名前: 橋本香織

---

- 所属: 東京慈恵会医科大学学術情報センター

山崎先生との出会いは大学でのひとコマの授業でした。若き日の先生の講義は、アメリカの大学生のような気さくな風情を漂わせながら誰よりも知的で鮮烈な印象があり、大学卒業後の進路として学術情報サービスの道を選ぶ大きな動機となりました。先生は若き日の私に、「研究とは(仕事とは)地道な(地味な)ものだ」と教えてくださったことがありました。その言のとおり日々を積み重ね、ご自分の道を切り開かれてきた背中を、私なりに見てきたつもりであります。研究に関してはご自分に厳しくありながら、皆に対しては不思議な親しみをもって導いていかれるお姿に心が和みます。出会いから四半世紀経っても、この不肖の(自称)教え子は何を成し遂げるでもなく、ただ漫然と日々を過ごしてしまい、先生のような生きざまで歩いては来られませんでした。今後とも変わらぬご指導賜りたく、どうぞよろしくお願い申し上げます。

「山崎茂明を語る」山崎先生との研究会

2018.2.24

Satom I



# 索引

この索引は、ファシリテーターと山崎先生の会話の中で生まれたキーワード集です。先生の頭の中をのぞくようなキーワードが並んでいます。頭の中なので、仲間のキーワードがなんとなくふわふわと集まっています。

モチベーションをあげる	純粋な気持ち	専門職とは 紀伊国屋書店での経験
雑誌塾の意義	ものをかくことは文学の世界だけかと思っていた	
場を作る	サービス大会が継続しているのは	大学院の訳読
教えあう=学びあう	雑誌塾が継続できなかったのは	競い合って（20ページだれかが書けば・・・）
具体的なことをみせて、自身にもつながる		人が集う
手書きの勉強計画表	教えるという立場	控え目な女性
	サーチガイド 今でも生きている	生のノート
知らないこともかける/知っているからかくではない/知らないことをエネルギーとして		評価はしない世界
きおいなく	適塾	実務で展開
	40代から旅へ	
教育・研究		LANCET 包丁一本
	19世紀医学ジャーナリズム	
Natureへ投稿		科学者の不正行為に図書館が取り組む

## 海外渡航記録(2018年2月現在)

### 1) 1987年5月16日－6月16日:アメリカ医学図書館への旅(学長命令)

一ヶ月の米国出張、ポートランドでの医学図書館協会年次大会への参加後、シンシナティ、ワシントン、ボルチモア、フィラデルフィア、ニューヨーク、ボストン、シアトルと、主要な医学図書館を訪問した。

### 2) 1988年5月21日－6月5日:第3回ヨーロッパ科学編集者会議(バーゼル:口頭発表)

初めての国際会議での口頭発表。スイスではバーゼル、ベルン、オルテン、ジュネーブなど訪れ、参加後、エジンバラ、ヨーク、ロンドンへ。エジンバラで内科医カレッジ図書館を訪問し、ファーガソン館長と面談しエジンバラ医学とフィラデルフィアの強い結びつきを知る。カレッジに掲げられたジョン・モーガンの肖像画をきっかけにして、アメリカ医学教育形成史のテーマを見つけた。

### 3) 1989年7月1日－9月28日:米国 College of Physicians of Philadelphia, 訪問研究員

3ヶ月の短い留学であったが、Academic origin of the first professor before the Civil War (Scientometrics) を完成させることができた。

### 4) 1990年8月31日－9月14日:第32回国際医学史学会(アントワープ:口頭発表)、

ベルギー、オランダ)。会議では発表後フロアで3名の研究者から質問を受け、フィラデルフィアでの調査に反響があり、満ち足りた気持ちになった。アントワープ、メッヘレン、ブリュッセル、アントワープ、ブリュージュなどベルギー、そしてオランダのアムステルダム、ライデンを訪問。びぶろす誌に、エッセイを発表した。

### 5) 1992年7月4日－18日:米国 College of Physicians of Philadelphia 図書館

Philadelphia Journal of Medical and Physical Sciences を対象に、ニュース記事の情報源調査をおこなった。

### 6) 1993年5月13日－23日:シカゴ、第93回米国医学図書館年次大会(口頭発表)

“Research activities in life sciences in Japan observed from publication of papers”を口頭発表した。AMA図書室で、Transaction of the AMA を閲覧した。

### 7) 1995年8月29日－9月11日:ロンドンWellcome財団医学史図書館、訪問調査

19世紀医学ジャーナリズム調査で Historical Library で調査。館員の勧めで、財団の研究プログラムの評価グループを訪問し、Grant Lewison 博士らと知り合う。ビクトリア・アルバート博物館(V&A Museum)でウエッジウッド展を見る。

### 8) 1996年6月23日－30日:科研「海外学術データベース調査」

フィラデルフィアへ。Narin 博士が代表になる CHI Research を訪問。

### 9) 1996年12月8日－12日:科研「海外学術データベース調査」

ワシントン。NSF, NAS を訪問。



- 10) 1997年2月11日-23日: 科研「海外学術データベース調査」  
フィラデルフィア、ワシントン。
- 11) 1997年12月5日-14日: 科研「海外学術データベース調査」  
ロンドン、ノッティンガム
- 12) 1998年2月8日-14日: 科研「海外学術データベース調査」  
ワシントン、ボルチモア。研究公正局(ORI)への訪問は日本からの最初であった。NSF(OIG)、ミッシェル・ラホーレット教授とも面会し、ボルティモアコクランセンターを訪ねた。『科学者の不正行為』を執筆することを決めた。
- 13) 1998年5月22日-30日: フィラデルフィア、第98回米国医学図書館年次大会
- 14) 1998年9月7日-18日: 2nd Int AESE/CBE/EASE Joint Meeting、ワシントン(ポスター発表)  
ORI と Kennedy Institute of Ethics Library 訪問。
- 15) 2000年2月23日-3月2日: ワシントン  
Kennedy Institute of Ethics Library
- 16) 2000年11月17日-25日: ベセスダ(MD)  
1st Research Conference on Research Integrity への参加
- 17) 2001年9月5日-21日: 米国東海岸私的旅行  
(ワシントン、ボルチモア、フィラデルフィア、9.11のため帰国延期)
- 18) 2002年11月15日-22日: ポトマック(MD)  
2nd Research Conference on Research Integrity でポスター発表
- 19) 2003年6月6日-15日: バース(England)  
第8回ヨーロッパ科学編集者会議でポスター発表
- 20) 2004年5月14日-21日: バンクーバー(カナダ)、第47回科学編集者会議(CSE)への参加
- 21) 2004年9月9日-17日: ロンドン、アキシミンスター: Lancet 誌の事跡調査  
地元の医師で Lancet 誌の創刊者 Thomas Wakley について論文を発表していたエバンズ氏の協力を得て、直系のファミリーと会い Wakley の生誕地(デボン州ランドファーム)を案内してもらった。帰路、埋葬地(ロンドン、ケンゾールグリーン墓地)も訪問した。
- 22) 2006年9月7日-20日: フィラデルフィア、ワシントン: 19世紀米国医学誌の事跡調査、フィラデルフィア市内の編集者の墓地を訪問した。
- 23) 2008年9月10日-20日: ワシントン、Kennedy Institute of Ethics Library
- 24) 2013年9月3日-13日: ワシントン、Bioethics Research Library(KIE)
- 25) 2014年9月3日-12日: ロンドン、Lancet 関連の資料調査、Wellcome Library
- 26) 2015年9月2日-10日: ロンドン、Lancet 誌の事跡調査、創刊時の編集オフィス、210 Strand Dely's Wine Bar
- 27) 2017年8月23日-31日: ロンドン、Lancet 誌の事跡調査、Wakley street をはじめ、ロンドン市内をめぐる。

## ミスコンダクト研究年表(2018年10月、山崎茂明作成)

- 1957年:スプートニクショック
- 1958年:National Defense Education Act
- 1974年:Summerlin 事件(NY スローン・ケタリング癌研究所)
- 1980年:Bayh-Dole 法
- 1980年:Gore 議員、生物医学分野における不正行為委員会(下院)
- 1980年:アルサブティ事件(60 編盗用)
- 1982年:Betrayers of the Truth (Broad, Wade『背信の科学者たち』1988年、牧野賢治訳)
- 1986年:ボルチモア・イマニシ=カリ事件、1996年に決着
- 1991年:大学設置基準の改訂
- 1992年:ORI(Office of Research Integrity)設立
- 1994年3月13日:シカゴ・トリビューン、クルードソン記者スクープ「フィシャー事件」、
- 1994年:Ranking Japan's life science research.(Nature, S Yamazaki)
- 1994年:Pearce 事件(聖ジョージ病院医学校)
- 1995年:科学技術基本法、科学技術創造立国
- 1996年—Database の将来像をめぐる調査研究
- 1997年:ヘルマン・ブラッハ事件
- 1998年2月:研究公正局(Office of Research Integrity)訪問
- 1998年:大学等技術移転促進法
- 2000年11月:ベセスダ、第一回 Research conference on research integrity
- 2000年12月:research misconduct の連邦政府定義、FFP
- 2002年3月:『科学者の不正行為』準備期間4年
- 2002年5月:シェーン事件
- 2002年11月:ポトマック、第二回 Research conference on research integrity
- 2004年:『インパクトファクターを解き明かす』情報科学技術協会
- 2004年:国立大学の独立行政法人化
- 2004年:大阪大学下村研の Nature Medicine(2004年10月記者会見発表、2005年5月ねつ造事件となり、撤回)
- 2004年:理化学研究所T博士事件
- 2004年:World University Rankings (THES: Times Higher Education Supplement)
- 2005年5月:中国語訳『科学者の不正行為』が清華大学出版会から出版
- 2005年:research misconduct の連邦政府定義、修正版
- 2005年:ES 細胞捏造事件
- 2007年:『パブリッシュ・オア・ペリッシュ』みすず書房
- 2008年8月:あいみっく誌に「論文発表の倫理」連載開始
- 2013年:『科学者の発表倫理:不正のない論文発表を考える』丸善出版
- 2014年2月:STAP 細胞事件
- 2014年5月:日本記者クラブ、日本発の研究は信頼回復できるか; STAP 細胞論文のゆくえ
- 2015年:『科学論文のミスコンダクト』丸善出版
- 2015年3月:『科学の健全な発展のために』、日本学術振興会(丸善出版)
- 2015年4月:日本医療研究開発機構(AMED)
- 2016年4月:公正研究推進協会(吉川弘之会長、浅島誠理事長)

## 研究不正と関連用語

Mistake: 不注意や知識不足による誤り、非難の度合いは弱く、生活の中で人間が犯す日常的な間違いや誤りに

Error : mistake よりも間違いの度合いが強く、科学的・分析的用語

Misconduct: 不正行為、非行、違法行為

倫理と道徳 (Ethics, Moral)

倫理: 人として守るべき道。道徳。モラル。行動を命ずる規範が倫理である。

Morality と ethics の違いは、道徳は社会における最も包括的なスタンダードを示し、これは、職業や組織のルールにかかわらず、上位に適用される。

倫理は、行動の包括的なスタンダードでなく、特定の職業、仕事、組織、グループのスタンダードである。

FFP: Fabrication, Falsification, Plagiarism (ねつ造、改ざん(偽造)、盗用)

研究の不正行為: research misconduct

研究の公正さ: research integrity

RCR (Responsible Conduct of Research): 責任ある研究行動

ORI (Office of Research Integrity): 研究公正局、DHHS/PHC/NIH: 保健福祉省、公衆衛生庁、国立衛生研究所)

NSF (National Science Foundation): 全米科学財団

Authorship: ①原作者たること、②原作者がだれであるかということ(新英和中辞典)、  
著作者であるということ(ジーニアス英和辞典)

---

山崎茂明先生愛知淑徳大学ご退職記念講演会

## 山崎茂明を読む

2018年2月24日(土):午後2時-5時

愛知医科大学

編集・制作・発行

講演会実行委員会

西村飛俊、小林晴子

アドバイザー

坪内政義

発行日 2020年5月20日

---